
夏の想い出

氷最

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の想い出

【著者名】

NZマーク

【作者名】
氷最

【あらすじ】
切なく仕上げました。あまり長くないので是非読んでみてください。

また蝉の鳴く季節が来た。

僕は16回しかこの季節を体験していないがもう飽きた。

僕は蝉が嫌いだ。

うるさいし何と言ってもあの様相が駄目だ。

基本的に僕は昆虫という部類は嫌い。

夏は虫が多くて嫌いだ。

もうすでに夏休みだ。

学校に行く必要はない。

毎日家で勉強、食事、ゲーム、睡眠の繰り返し。
しかしそれも2日、3日もすれば飽きた。

連絡が来る筈のない携帯電話を片手に持ちながら僕は何かを期待していた。

もう夏休みも中盤に差し掛かっただぐらいだろう。

携帯電話が鳴つた。

メールだ。

春日 凪。懐かしい名前だ。

最後に彼女の名前を聞いたのは去年の丁度この時期だ。

僕はメールに返事をしなかつた。

僕は彼女に返事をする必要はない。

僕は久々に家から外の世界に出た。

やはり蝉がうるさい。

そして暑い。

蝉の鳴き声が暑さに拍車を立てる。

苛々する。

殺意が芽生える程に。

でも僕には行くべき場所がある。

その為ならこんな物辛くも何ともない。

家を出てどれくらいいたつたのだろう。

僕は電車に乗り去年も行った場所に向かおうとしている。
まだ引き返せる。

まだ戻ることが出来る。

そんな考えもくだらないことに気が付いた。

僕は行かなければ行けない。

僕は電車を降りた。

家を出てどれくらい時間がたつたのだろう。

辺りの風景は田舎のようだ。そして陽も傾きはじめていた。

僕はとあるアパートに向かつた。

そこは駅からそう遠くない距離にあった。

階段を上り部屋の前で立ち止まつた。

【春日】

懐かしい名前のプレートが貼られている。

僕はポケットから鍵を出しドアを開けようとした。

しかしどアは勝手に開いた。

「遅かつたね。」

彼女は僕にそう言って少し微笑んだ。

「悪い。でもうちからいらいくら頑張つてもこのへんにはかかるわ。」

彼女は僕を部屋に招き入れてくれた。

一年ぶりに彼女にあつた。

僕にはもつと長く感じていた。

彼女といられるのは今日だけ。

僕は彼女の温もりを手放したくなかった。

次の日の朝、僕は部屋を出ようとしたとき。

「いってらっしゃい。」

部屋から彼女の声が聞こえた。

「あ、わりい。起こしちまつたか。」

「ううん。大丈夫。ただ、いってらっしゃいが言いたかつただけ。

彼女は微笑んだ。

「そつか。いってきます。」

僕も微笑むことが出来た。

「うん。いってらっしゃい。」

去年の僕は微笑むことすら出来なかつた。

外の世界に出た。今日も蝉の鳴き声がうるさいし暑い。
気のせいだろうか僕の頬を水が流れた気がした。

僕は近くの交差点に向かつた。

途中で花と水を2つずつ買つた。

そこには去年僕が置いた花と水が入つたペットボトルがあつた。

僕は新しい物と交換した。

手を合わせた。

もう一ヶ所行くところがあつた。

ここから少し山に入った所にそれはあつた。

【春日】

それにも懐かしい名前が彫られていた。

それでも去年僕が置いた花と水が入つたペットボトルがあつた。

新しい物と交換し【それ】も綺麗に磨いた。

やはり氣のせいではなかつたみたいだ。

僕の頬を水が止まることなく流れ続けていた。

気付けば僕は彼女の墓石の前で大粒の涙を流しながら大声で泣いていた。

彼女は一昨年あの交差点で事故にあって死んだ。
僕は信じられなかつたけどそれが現実であつた。

彼女は死んだ。一度と会つことは無いと思つていた。
しかし去年、ある出来事が起きた。

彼女からのメールが届いた。

最初は信じる筈もなかつた。

でも現実は違つた。

あの部屋で彼女は僕を待つていてくれた。

そのとき一年に一度、彼女の命日に会つことが僕らの秘密になつた。

彼女は僕に会いに来続けてくれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9031c/>

夏の想い出

2010年12月31日19時15分発行